

ありがとう

回顧録

“Until we meet again”

大久保広之

第1章 幼少時代

1961(昭和36)年9月2日、北海道浦河郡浦河町堺町にて、父勉、母和代の末っ子でこの世に導かれました。

両親は同町で理髪店をやっていましたが、そのお店が火事により全焼、それを機に札幌厚別あさひ町の理容店に引越してきたと両親から聞いています。私が2歳頃です。

私の記憶もここからです。理容店の上で5人家族の生活が始まりました。居住スペースは8畳程でもとても狭かったです。2階への階段が凄く急で、何度も階段から落ちた事や、冬は隙間風がとても寒かったのを覚えています。

ここでの生活は、やはり5人家族には狭すぎ、1年前後で白石区南郷通8丁目理容店に引越しました。ここは凄く綺麗で広くてとても嬉しかったのですが、その分家賃も高かったのだと思います。

この頃父の商売は、なかなか厳しかったようで、一大決心し理容店を閉じて、一般サラリーマンとして白石にあった「暮らしのデパート」に勤めることになりました。母もパートとして勤めていました。



その後も、南郷通、本通り、発寒、北郷と転々と引越しをした事を覚えています。父母も私達の為に必死に頑張ってくれていたんだと思いますが、パートでいつも母が家に居ないことは子どもの私にはとても寂しかったのです。

小学生前でしたが、私は母の見様見真似でカレーライスを作って母の帰り待っていたことがあります。母はビックリして喜んでくれて、褒めてくれました。本当に嬉しいかった思い出があります。生活は大変でしたが、何か楽しい毎日でした。

白石区本通り10丁目アパートに住んでいた時に白石本通小学校に入学し、友達もできました。2年生の時には、白石区北郷に引越し、北郷小学校に転校しました。

両親は居住を安定させる為、市営住宅に応募し、当選するのを待っていましたが、翌年ようやく抽選に当たり、私が小学3年生の時に厚別青葉町の下野幌団地引越しました。これが両親と兄弟での最後の引越しになりました。団地の生活は私が8歳から17歳まで続きます。

この頃、友達も沢山でき、小学生の頃は、クワガタ虫、キリギリス、ザリガニ、川に釣り、などして遊び回っていました。春には竹の子、わらび、ミツバ、セリ、秋にはコクワの実、山栗、ヤマブドウ、落葉キノコ取りに励んでいたのを覚えています。なにより母が喜んでくれるのが嬉しくて夢中になっていたんだと思います。

その当時、家族5人の生活は金銭的に大変だったんだと思います。贅沢はしていませんし、できる状況ではありませんでした。年子の3人兄妹だったのですが、兄妹の私立高校入学が続き、入学金、授業料、バス代、日常の生活費用等で家計は切迫していたはずで、それでも愚痴も言わず必死に働いてくれていた父母の姿が目には焼き付いています。

そんな中、今後は私の受験が近づいてきました。成績がおぼつかなく、私立高校受験しか選択肢はありませんでしたが、これにも問題がありました。ある日両親の言い争いが聞こえてきたのです。「当然行かせてあげたいが、お金の工面はどうするのか？」それを聞いてしまった私は、家族を助けるため就職することを強く決心したのです。

第2章 就職

夜間定時制高校に入学し、千秋庵に就職しました。しかし、ミルクの匂いで体調を壊し退職。次は、自分でアルバイト情報誌から探して、面接しました。たまたま同級生の落合さんのお父さんが勤めていた大宮ホーローという会社だったのですが、なんと面接者が落合さんのお父さんだったこともあり、そのまま採用してもらえました。その時15歳でした。その会社で職場上司の陣内さん、宮本さん、鈴木さん達から大変お世話になり、人生と仕事の基礎を学びました。上司の指導もあり、一生懸命食らいついて働きました。それは家族生活を支えるために必死だったとも言えますが、家族の為に役に立つ事が嬉しかったんだと思います。

数年後、兄姉も高校卒業し就職しました。やつと少しは気持ち的に楽になりましたが、両親は過去の負債がまだ残っていたため、私はそれをカバーしながら過ごす日が続きました。

当時勤めていた大宮ホーローは、中卒の場合は日給月給制だったので休んだらその分給料が貰えない状況でした。そのため多少体調が悪くても休まずはたらいっていました。そんな中、乳性炎になり手術し、初めて一週間欠勤とになりました。解つてはいましたが、月末の給料は激減。「こりやだめだ」とショックを受けました。

当時私は28歳、兄姉の負担が少し抜けたぶん自分の将来の事や結婚のことを考える様になりました。「このままではいけない」と思い、3年勤めた大宮ホーローを退職しました。

その後、履歴書を持つて色々就職先をさがしましたが、一箇所だけ個人事業の太陽食品という会社で、営業職として月給で雇ってもらえることになりました。その会社でも一生懸命に働きましたが、その後退職することになりました。

辞める時、社長さんが実家の親の所にまで行ってくださり、「辞めないでもらいたい」と親に説得にきてくれたと聞きました。が、やはり将来の事を真剣に考えた結果でしたので、考えは変わりませんでした。

その当時は、学歴がないから、ちゃんとした会社には無理かなと落ち込んでいた時期でしたが、その中で自損交通事故を起こしてしまうなど、更に追い打ちをかけていました。

第3章 自衛隊

そんなときに閃いたのが、「自衛隊！」です。「自衛隊なら公務員だ！」と思い、既に自衛隊員だった兄に連絡し、自衛隊に入りたい旨を相談しました。

早速兄が上司に話をしてくれて即試験です。その当時は入隊する人が少なかつたから誰でも入れた時代です。試験日、テストはなんと全部アイコンタクトで答えを覚えてくれたため、当然合格。

私は16歳でしたが、二期下の高卒者とまじり陸上自衛隊倶知安駐屯地に教育入隊しました。みんな二年下だったことから私にも年上のプライドがあったため、夜布団をかぶって必死に勉強しました。当時が人生で一番勉強したと思います。

隊での生活は、特に仲が良かった同期の長尾さん、立花さん達と昼間から自衛特権で休みの日に倶知安の町お店でつけ払いでお酒を飲んで遊んで上官にばれて1カ月外室禁止なんてこともありましたが、楽しかった思い出が沢山あります。



その後、教育期間を無事終了しましたが、一所懸命勉強、訓練をしたお陰で、序列上位で終えることができ、配属希望が通り、本部管理中隊の整備管理小隊に勤務に就ける事になりました。

そこで先輩上官の小田さん、福本さん等沢山の方々から色々な事を教わり可愛いがってもらいました。そして自衛隊車両の整備が主体の小隊で整備の基礎を学ぶことができました。

当時の次の目標は、車が好きだったので自衛隊で活躍して、そのことで将来学歴を補うことに繋げようと言うことでした。そのために、必死に訓練、仕事に専念しましたが、自分でも意外に万能であることに気付きましたし、部隊で目をもたれる存在になりました。

自衛隊の賞状は引越し等でなくしてしまったが、いくつか名誉ある賞も頂いただきました。そんな努力の甲斐があり自衛隊契約満期の時にチャンス到来します。

いすゞの就職説明会があり応募し、担当者と面接することになりました。「大久保さん、是非いすゞに来てください」と言われたのが11月。自衛隊満期前の翌年1月までに採用決定を出しますからと言われ、その後も担当者から何度か連絡があり「就職は大丈夫だから正式には年明けに連絡します」と言われましたが、待てど暮らせど連絡が来ない。

ようやく2月に連絡がきましたが、「大変もし訳ありません、今回はごめなさい。自衛隊でもう少し頑張つて」という内容でした。愕然、凄くショックでした。

その時は「やはり学歴が」と思い落ち込みましたが、仕方なく任期を継続しました。その時21歳です。その年のゴールデンウィークに実家に帰り、新聞の求人欄にいすゞの募集を見つけました。そこでどうしても諦めきれずに直接電話することになりました。

人事部に回され、「二応一度履歴書を持ってきてください」と普通な対応で言われたため、隊に戻る前に直接履歴書を

持つていすゞを訪問しました。2階事務所に向かい階段を上がった時に見覚えのある方にバッタリ遭遇しました。自衛隊に就職説明会に来て話をし、その後採用を断った北村さんでした。

「大久保さん、どうしたの？」

「諦めきれず募集を見たので電話して履歴書を持つてきました」と伝えると、別室に連れて行かれ、北村さんから「大変申し訳ありませんでした」と平謝りに謝罪を受けましたが、その後の話に衝撃を受けました。自衛隊幹部から「大久保さんの就職は、本人の意向で断りたい」と言われたというのです。

「今日来てくれたと言う事はまだいすゞに就職したいと思つてくれているの？」

「ですから履歴書持つて伺いました」と私は言いました。

当初は履歴書だけ預けて「後日、書類選考で連絡します」との事だったのですが、案内された部屋で30〜40分待たされ、その後、なんと直接社長、他の幹部の方と急遽面接していただけることとなり、その場で無試験で採用が決まりました。その時は今でも鮮明に覚えています。凄く凄くうれしかった！

その後両親に聞いた話ですが、いすゞから不採用の連絡を受けた頃、俱知安から自衛隊幹部達が実家に来て「息子さん、自衛隊を退職させないでください」と説得に来ていたとのことでした。これで謎が解けました。愕然としましたが、その時は親を責められませんでした。

第4章 札幌いすゞモーター

21歳の昭和58年8月31日に自衛隊を退官して翌日9月1日に見習い期間なしの特別待遇で最初から正社員の辞令をもらいました。配属は希望の自動車整備士で採用してもらいました。これもそれまでの努力の結果だと思い、誇りに

思いました。

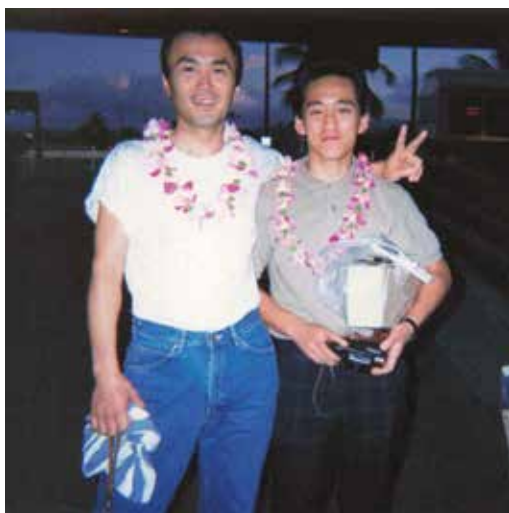
私は定時制高校中退、中卒の学歴の身です。皆んなは高卒以上です。絶対負けられないと必死に仕事に没頭しました。1年目で技能コンテストで札幌全社で最優秀賞(1位)をもらうことができました。その頃仕事はかなり忙しかったけれど職の安定の充実感があって、これなら自信を持つてお嫁さんをもらせる準備ができたと思いました。

結婚後は、更に生活を向上させる為整備士から希望して営業職に就きました。当時はいすゞの場合、整備士から営業への配置転換は整備士として使えない人を辞めさせる為の人事ともうわさされていたので、その中で自ら営業を志願をした訳ですから、現職営業マンから総スカンをくらうことになりました。「アイツ営業舐めてるな」と揶揄されることになったのです。

その頃長女智美を授かりました。まだその頃は父親としての自覚がまだ未熟だったな?(反省)。それでも新しい家族の為に必死に営業し、車を沢山売りました。営業マン新人ナンバーワン、札幌、全道、全国で沢山の賞をもらいました。本当に家族のために必死に努力しました。そして、お客様と会社の発展の為に先輩、上司達と熱い想いで仕事が出来ました。

後に色々な事があり労働組合の委員長をやる事になりましたが、その経験もその後の勉強、財産となりました。

その頃は、仕事が中心で家庭の事はあなたに任せきり。たまの休みは息抜きのパチンコ、子育て奮闘お構無し、今考えるといつも不安と苦しみを背負わせてしまっていたと深く反省しています。その不安と苦しみが私への愛を追い越したてたでしょう。



よく我慢してくれたね。気づくのが遅すぎだな〜ダメ

その後次女美里、三女彩美が生まれ、更に生活の安定、家族の為、14年勤めたいすゞを退職し、会社設立独立しました。

その後札幌いすゞモーターは解散しましたが、江口さんの声かけで2年に1度OB会を開催しました。丹羽さん、中田さん、郷古さん、藤田さん、白木さん、横山さん、富樫さん、懐かしいです。

第5章 出会い

いすゞに勤めていた頃の仲間繋がりで、ある会に参加しました。今で言う合コンパーティーで百人位いたでしょうか。その中で行われたゲームの中で、初めての信子さん、あなたに会いました。

ゲームは当時テレビで流行っていた「フーリングカップル5対5」的なゲームで、男女それぞれ5人づつが、気になった相手の番号を書き、マッチングするとカップル誕生というものです。

信子さん、あなたはそこに居ましたが、私は不覚にもあなたの番号を書きませんでした。あなたのことが一番気になっていたのに、私を選んでくれることはないと思ひ込んでしまい、他の番号を書いてしまい、カップルは不成立。一生の不覚でした。

しかし、奇跡は起きます。その後私がトイレからでた時、偶然出口でバツタリあなたに遭遇します。「さつきは、、どうも、、」と、しどろもどろになる私ですが、勇気を振り絞って電話番号を聞きました。そしてなんと教えてくれたのです。嬉しくて舞いあがりました！その時の数秒の奇跡、筋書きの無い奇跡がなければ今の人生はなかったのです。

それからは、猛アタックの日々、次の日に早速電話、デートの約束、やったー！うれしかった！それから何度もデート、なんか素朴で美人で可愛いくて話しが合って、一緒に暮らすようになって、すんなりと結婚、ゴンドラステージで登場となり

ました。(この頃は少し調子に乗ってたかもしれませんが。反省！)

第6章 独立起業

いすゞ自動車が乗用車販売から撤退することとなり、営業マンとして追いかけてきた夢や目標を見失った私は、迷いの末に退職を決意しました。やりたいことも明確にないまま、知人の板金工場を手伝いながら、しばらくの日々を過ごしていました。

当時、長女と次女を抱える家庭の大黒柱でありながら、自覚も足りず、不安定な気持ちで過ごしていたと思います。

けれど、やはり「私は車が好きだ」、その思いが、少しずつ私に再び目標と夢を与えてくれました。いすゞ「ジェミニ」、「117クーペ」、「ベレット」これらの車に憧れていすゞに入社した私にとって、独立後も「ジェミニ」を二台ずつ丁寧に仕上げていくことは、大きな喜びでした。

そしてついに、個人事業として「オートアシスタント」を立ち上げる決意を固めました。

妻や子供たちを支えながらの挑戦は、再び家族に不安を与えたかもしれませんが。

そこから31年、色々な方々にお世話になりながら、会社を続けてこれたのは幸せだったと思います。

第7章 ロイズ山崎社長との出会い

目を閉じると、今もなお心に深く残る出会いが静かに浮かんできます。

ロイズの山崎社長とのご縁、それは、私の人生の中で最も大きな奇跡だったと思います。

思い起こせば、平成8年8月。雑誌に掲載された私のジェミニに目を留めて、山崎社長が店舗を訪れてくださったのです。

「できれば、ノーマルに近づけてほしい」と依頼され、費用も別途で構わないと仰ったその言葉に、当初は半信半疑だったものの、やがてご購入を決めてくださり、名刺をいただいたとき、その名を見て驚きました。

あの「生チョコレート」で知られるロイズの社長さんだったのです。

ジェミニの整備を終え、当別町にある泉亭さんの倉庫まで車を運んだときのこと。そこには他にも数台のクラシックカーが並び、山崎社長からその車たちの美装も依頼されました。驚いたのは、社長ご自身が作業に加わってくださったこと。共に道具を運び、共に作業したあの時間が、すべての始まりでした。

その後は、トヨタ2000GT、ケンメリ、ハコスカ、フェアレディZ、フェラーリなど数々の名車の整備や修理、購入のご相談を任せていただくようになり、私自身、多くの技術と経験を積ませていただくことができました。

車に限らず、特命として東日本大震災の際には、ロイズのチョコレートをビッシリ積んだ2トントラックで仙台・大崎市まで救援物資を届けるという、大切な使命をお預かりしました。苦小牧から青森経由で現地に向かったあのとき、社長の信頼に応えることができたという喜びと責任の重みを、今でも強く覚えています。

第8章 谷板金・谷会長との日々

いすゞの営業マンとして働いていた平成元年、私が初めてトラック「エルフ」を販売させていただいたのが、谷板金の谷会長でした。

そこからのお付き合いは、なぜか不思議と気が合い、公私にわたって長いご縁となりました。

仕事の話から趣味の話へと広がり、気づけば私たちの会話はいつも溪流釣りのことばかり。

それからというものの、大物のジマスを求めて、北海道中を一緒に巡るようになりました。

川を渡るときは、二人で手を取り合つて慎重に歩き、崖を降りるときにはロープを張つて、お互いを支え合いながら進みました。

一度、熊よけスプレーの試し吹きをした際、風向きを見誤つて自分たちにかかつてしまい、大慌てしたことも、今では笑い話です。

谷会長は、私の人生における「釣りの師匠」であり、ブライベートでは最も多くの時間を共に過ごした方です。

自然の中で交わした会話、静かな水面を見つめながら語り合つた言葉の数々は、私の宝物です。

そして、谷会長のご家族にも、公私にわたり温かく接していただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

終章 最後に

若い頃からいつも私を助けてくれたあなたでしたが、独立したことで更にあなたに、不安、心配、苦しみをまたもや背をわせてしまいましたね。

子供達の成長では楽しい事が沢山ありました、その影でのいつもあなたの支えがあつたからこそここまでこれたのです。ただ感謝しかありません。壮絶なスリリングな人生を歩ませてしまったと反省しています。

ただ、これが私にできる精一杯の事でした。だからこれからは残された時を精一杯自分らしく生き抜いてください。私の人生はあなた、子供達、そして、出会えた皆さんに巡り会えた事か何よりの幸せでした。

思い起こせば、苦しいこともありましたが、それ以上に数多くの奇跡を体験して、色々な困難を乗り越えてこれました。出会う事が出来た、あなたと子供達、そして仲間のお陰で面白い、楽しい、悔いのない人生でした。

神様にひとつだけ願いを叶えて貰えられるのなら、できるだけ穏やかな人生をあなたに。

ありがとう。

Until we meet again

by 大久保広之